

阪神・淡路大震災のアスベスト曝露再検証

西宮市・上田 進久（医師）

震災からやがて 25 年になるが、マスコミ報道によるアスベスト被害者が 6 名に過ぎない事や、解体現場周辺での環境庁のアスベスト濃度値が民間団体の僅か 1/10 であることに疑問を持ち、さらに「飛散は低濃度でありアスベスト疾患と震災との因果関係はない」とする自治体の対応に納得できないでいた。ところが昨年、被災地で 1 か月間勤務した警察官が中皮腫で死亡したことを知り、これを機に当時の調査資料を検証することにした。

被災地で倒壊したビルには、白石綿よりも数倍危険な青や茶石綿が吹きつけられていたが、白石綿だけの測定であることが判明した。当時は除去方法の法規制はなく行政指導だけでは飛散を防止するには至らなかった。倒壊現場から青や茶石綿が飛散した混合曝露の状態が約半年間広範囲に及んだ。現場では、シートなし・散水なし・マスクなしの状態で作業が行われ、マスクも着けずに住民が見守っていた。単に白石綿濃度値だけの評価はリスクを過小評価している。作業員の他にもハイリスクの人達への注意喚起や検診体制の構築が急務である。